View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

『維摩経玄疏』訳注（５）

菅　野　博　史

本訳注は，「『維摩経玄疏』訳注（一）」（『大倉山論集』40，1996.12，235-261），「『維摩経玄疏』訳注（二）」（『大倉山論集』45，1999.3，297-316），「『維摩経玄疏』訳注（三）」（『多田孝文名誉教授古稀記念論文集　東洋の慈悲と智慧』所収，33-54，山喜房仏書林，2013.3），「『維摩経玄疏』訳注（4）」（『創価大学人文論集』29，2017.3，pp. 33-72）の続編である。創価大学大学院の授業で，院生と『維摩経玄疏』を一緒に読んでいる。参加者は，横溝靖彦，大津健一，野原耕平，石田幸司の四氏である。

今回翻訳した『維摩経玄疏』の科文を下に示す。これまでの範囲の科文は，「『維摩経玄疏』訳注（4）」を参照。科文において，「項」の下の層については，算用数字を用いる。科文の名称については，テキストの箇所によって若干の異同が見られるので，適宜処理する。科文の名称の後の（　）に，大正蔵巻第 38 の頁・段・行を挿入する。

翻訳部分に，大正蔵巻第 38 の頁・段を挿入する。

注のなかの引用典拠については，CBETA を利用する。『大日本続蔵経』については，『新纂大日本続蔵経』を使用し，略号を X とする。

『維摩経玄疏』科文

『維摩経玄疏』巻第三

3.　四教分別を明かす（532b5）

3.1　四教の名を釈す（532b16）

3.2　所詮を辨ず（534a20）

3.21　四諦の理に約して所詮を明かす（534b2）

3.211　所詮の四諦の理を明かす（534b3）

3.212　能詮の教を明かす（534b6）

3.213　経論に対するを明かす（534b9）

3.2131　経に対す（534b10）

3.2132　論に対す（534b16）

3.22　三諦の理に約して四教の所詮の理を明かす（534c17）

3.221　三諦の所詮の理を明かす（534c19）

3.222　能詮の四教を明かす（534c27）

3.223　経論に対するを明かす（535a5）

3.23　二諦の理に約して所詮を明かす（535a16）

3.231　正しく所詮の理を明かす（535a17）

3.232　能詮の四教を明かす（535a28）

3.233　経論に対す（535b2）

3.24　一諦の理に約して所詮の理を明かす（535b12）

3.241　正しく所詮の理を明かす（535b13）

3.242　能詮の四教を明かす（535b24）

3.243　経論に対す（535b28）

［翻訳］

532b
維摩経玄疏巻第三

天台山修禅寺沙門智顗撰

3. 四教分別を明かす

第三に四教分別を明かすとは，前に三観もて浄無垢称を釈するを明かす。理智無惑に約するに，智は能く理に称い縁に称うが故に，浄無垢称の号を受く。但だ衆生の機縁は同じからざるを以て，頓・漸の異なり，不定・秘密[1]の殊なり有るを致す。是こを以て古今の諸師は各おの理釈を為す。今，立つる所の義は，意として前の規に異なる。故に無言の理をば，悉檀もて縁に赴いて巧みに説く。略して四教を撰して，以て其の宗を暢べ，用て毘摩羅詰の名を通ず。若し能く斯の旨に達せば，但だ此の経の文義皎然たるのみに非ず，漸・頓・不定・秘密の蹤に皆な滞り無きなり。

今，此の義を明かすに，略して七重を開く。第一に四教の名を釈し，第二に所詮を辨じ，第三に位に約して分別し，第四に権実を明かし，第五に観心に対し，第六に諸の経論を通じ，第七に此の経の文を銷す。

3.1　四教の名を釈す

第一に四教の名を釈すとは，即ち四意と為す。一に三蔵教の名を釈し，二に通教の名を釈し，三に別教の名を釈し，四に円教の名を釈す。

第一に三蔵教の名を釈すとは，此の教は因縁生滅の四聖諦の理を明かす。正しく小乗を教え，傍ら菩薩を化す。言う所の三蔵とは，一に修多羅蔵，二に毘尼蔵，三に阿毘曇蔵なり。

一に修多羅蔵とは，修多羅は，此には或いは無翻と言い，或いは有翻と言う。有翻と言う[2]とは，亦た多家の不同有れども，多く法本を用て翻と為す。謂う所は，出世の言教の本なり。故に法本と云う。即ち是れ四つの『阿含経』[3]なり。

二に毘尼蔵とは，此に翻じて滅と言う。仏は作・無作戒を説いて，身口の

1　密　底本の「蜜」を宋本によって改める。以下同じ。

2　言有翻　宋本によって「言有翻」の三字を補う。

3　四つの『阿含経』『長阿含経』『中阿含経』『増一阿含経』『雑阿含経』のこと。

悪を滅す。是の故に滅と云う。即ち是れ八十誦律[4]なり〔因は果に従って名を得るなり〕。

三に阿毘曇蔵とは，阿毘曇，此には翻じて無比法と言う。聖人は智慧もて法義・戒・定を分別すること無比なるが故に，無比法と云う。若しは仏は自ら法相の義を分別し，若しは弟子は法相を分別するは，皆な阿毘曇と名づくるなり。

此の三法をば通じて蔵と名づくるは，蔵は含蔵を以て義と為す。但だ解者は同じからず。有るが言わく,「文は能(532c)く理を含むが故に, 名づけて蔵と為す」と。有るが言わく,「理は能く文を含むが故に，名づけて蔵と為す」と。今言わく，三法の名は各おの是れ一句なり。三名は各おの文理を含むが故に，蔵と名づくるなり。阿含は即ち是れ定蔵なるが故に，次第に求むと云うなり。毘尼は即ち是れ戒蔵なるが故に，因縁もて求むと云うなり。阿毘曇は即ち是れ慧蔵なるが故に，性相もて求むと云うなり[5]。此の教は的(まさ)しく小乗に属す。故に『法華』に云わく,「小乗の三蔵に貪著する学者」[6]と。

第二に通教の名を釈す。通とは，同なり。三乗は同じく稟くるが故に，名づけて通と為す。此の教は因縁即空，無生の四真諦の理を明かす。是れ摩訶衍教の初門なり。正しく菩薩の為めにして，傍ら二乗を兼ぬ。故に『大品経』

4　八十誦律　優波離が誦出した根本律のことで，現存しない。後に，これに基づいて，四分律，五分律などが分立したといわれる。『高僧伝』巻第十一，「因命持律尊者優波離比丘使出律蔵。波離乃手執象牙之扇，口誦調御之言，滿八十反，其文乃訖。於是題之樹葉，号曰八十誦律。是後迦葉，阿難，末田地，舎那波斯，優波掘多，此五羅漢次第住持」（T50, no. 2059, p. 403, a5-10）を参照。

5　阿含は即ち是れ定蔵なるが故に，次第に求むと云うなり。毘尼は即ち是れ戒蔵なるが故に，因縁もて求むと云うなり。阿毘曇は即ち是れ慧蔵なるが故に，性相もて求むと云うなり　『阿毘曇毘婆沙論』巻第一，「復次修多羅中応次第求。以何等故。世尊説此。次復説此〔如説信仏，次応信法，是次第求義〕毘尼中応因縁求。如説此戒縁何事制。阿毘曇中応以相求，不以次第」（T28, no. 1546, p. 2, a13-16）を参照。

6　『法華』に云わく,「小乗の三蔵に貪著する学者」『法華経』巻第五，安楽行品,「亦不親近　増上慢人　貪著小乗　三蔵学者　破戒比丘　名字羅漢　及比丘尼　好戯笑者　深著五欲　求現滅度　諸優婆夷　皆勿親近」（T09, no. 262, p. 37, b23-27）を参照。

勧学品に明かさく,「三乗を学ばんと欲せば,悉く当に般若を学ぶべしと教う」[7]と。言う所の通とは，乃ち多塗有り。略して八義を出だす。一に教通，二に理通，三に智通，四に断通，五に行通，六に位通，七に因通，八に果通なり。教通とは，三乗は同じく幻化即空の教を稟くるなり。理通とは，同じく是れ偏[8]真の理なり。智通とは，同じく巧度の一切智を得るなり。断通とは，界内の惑断ずること同じきなり。行通とは,見思無漏の行は同じきなり。位通とは,乾慧地従り乃ち辟支仏地に至るまで，位は皆な同じきなり。因通とは，九無閡は同じきなり。果通とは，九解脱，二種の涅槃[9]の果は同じきなり。通の義に八有れども，但だ通教と名づくるは，若し通教に因らざれば，則ち理通を知り，乃至，通果を成ぜざるなり。故に諸の大乗方等，及び諸の般若に二乗の得道有るは，皆な同じく此の教を稟くればなり。

第三に別教の名を釈すとは，別とは，不共の名なり。此の教は二乗の人に共じて説かず，但だ菩薩を教うるのみなるが故に，別教と名づく。此の教は正しく因縁仮名，無量の四聖諦の理を明かす。的しく菩薩を化し，二乗に渉らず。言う所の別とは，義は乃ち多塗なれども，略して八意を出だす。一に教別，二に理別，三に智別，四に断別，五に行別，六に位別，七に因別，八に果別なり。故に別教と名づく。教別とは，恒沙の仏法を説くは，但だ菩薩の為めなるのみ。理別とは，蔵識に恒沙の俗諦の理有るなり。智別とは，道種智なり。断別とは,恒沙の無知,界外の見思,無明は断ずるなり。行別とは,菩薩は歴劫に自行・化他の行を修するなり。位別[533a]とは，三十心[10]に無明を伏

7　『大品経』勧学品に明かさく,「三乗を学ばんと欲せば，悉く当に般若を学ぶべしと教う」『大品般若経』巻第三，勧学品,「善男子，善女人，欲学声聞地，亦当応聞般若波羅蜜，持誦読正憶念如説行。欲学辟支仏地，亦当応聞般若波羅蜜，持誦読正憶念如説行。欲学菩薩地，亦当応聞般若波羅蜜，持誦読正憶念如説行。何以故。是般若波羅蜜中，広説三乗，是中菩薩摩訶薩，声聞，辟支仏当学」（T08, no. 223, p. 234, a15-21）を参照。

8　偏　底本の「遍」を宋本によって改める。

9　二種の涅槃　有余涅槃と無余涅槃のこと。『四教義』巻第一,「果通者，九解脱有余無余二種涅槃之果同也」（T46, no. 1929, p. 722, a11-12）を参照。

10　三十心　十住・十行・十廻向を指す。

するは是れ賢位，十地に真を発し無明を断ずるは是れ聖位なり。因別とは，無閡の金剛因なり。果別とは，解脱・大涅槃の四徳[11]の果なり。別の義に八有れども，但だ別教と名づくるは，若し別教に因らざれば，則ち別理を知り，乃至，別果を得ざるなり。

問うて曰う。何が故に説いて不共教と為さず，別教の名を作すや。

答えて曰う。『大智論』に不[12]共般若を明かすは，即ち是れ二乗の人に共じて説かず[13]。『不思議経』[14]の如し。今，別教を明かすは，方等，『大品』を説くに，二乗は共に説を聞けども，別して菩薩を教うるが如し。兼ねて円教を簡非せんと欲す。別は通に異なると雖も，猶お未だ円ならざるなり。

第四に円教を釈すとは，円は不偏を以て義と為す。此の教は不思議因縁，中道実相の理を明かす。事理は具足して，偏ならず別ならず。但だ最上の利根の大士を化するが故に，円教と名づくるなり。言う所の円教とは，義は乃ち多塗なれども，略して説くに八有り。一に教円，二に理円，三に智円，四に断円，五に行円，六に位円，七に因円，八に果円なり。教円とは，直ちに一実諦を説く言教は不偏なり。理円とは，一実は即ち法界海の理にして不偏なり。智円とは，一切種智なり。断円とは，五住[15]は円かに断ずるなり。行

11　大涅槃の四徳　大涅槃の備える常・楽・我・浄の四種の徳のこと。

12　不　底本の「大」を版本によって改める。

13　『大智論』に不共般若を明かすは，即ち是れ二乗の人に共じて説かず　『大智度論』巻第三十四，「般若波羅蜜有二種。一者与声聞，菩薩，諸天共説。二者但与十住具足菩薩説」（T25, no. 1509, p. 310, c13-14），同，巻第七十二，「有人言，般若有二種。一者唯与大菩薩説。二者三乗共説」（同前，p. 564, a21-22），同，巻第百，「復次如先説，般若有二種。一者共声聞説。二者但為十方住十地大菩薩説，非九住所聞。何況新発意者」（同前，no. 1708, p. 754, b22-25）を参照。

14　『不思議経』『華厳経』を指す。『法華玄義釈籤』巻第九，「若大論中指華厳経名不思議経，当知並是随翻訳者取名各別，其義不殊」（T33, no. 1717, p. 880, c29-p. 881, a1），『仁王経疏』巻第六，「智度論云，心行処滅，言語道断。大般若云，心言路絶，名不思議経」（同前，no. 1708, 413, b29-c2）を参照。

15　五住　『勝鬘経』一乗章，「煩悩有二種。何等為二。謂住地煩悩，及起煩悩。住地有四種。何等為四。謂見一処住地，欲愛住地，色愛住地，有愛住地。此四種住地，生一切起煩悩。起者，刹那心刹那相応。世尊，心不相応無始無明住地」（T12, no.

円とは，一行は一切行なり。位円とは，初めの一地従り諸地の功徳を具足するなり。因円とは，双べて二諦を照らし，自然に流入するなり。果円とは，妙覚，不思議三徳の果は不縦不横なり。円の義に八有れども，但だ円教と名づくるは，若し円教に因らざれば，則ち円理を知り，乃至，円果を成ずることを得ざるなり。

問うて曰う。四教は何れの経論に出ずるや。

答えて曰う。四教は諸の経論に散在す。処として明かさざる無きなり。上に『法華経』に明かす所の「小乗の三蔵に貪著する学者」を引くが如し[16]。『成実論』に云わく，「故に我れは正しく三蔵の中の実義を論ぜんと欲す」[17]と。豈に三蔵教に非ざらんや。『大品経』勧学品は，三乗に同じく般若を学ぶを勧む[18]。『中論』に云わく，「諸法実相を得るに，三種の人有り」[19]と。豈に通教に非ざらんや。『無量義経』に云わく，「摩訶般若，華厳海空は，菩薩の歴劫修行を宣説す」[20]と。『大智論』に云わく，「般若に二種有り。一には二乗に共じて説く。二に二乗に共じて説かず」[21]と。此くの如き等の経論は，豈に別教

353, p. 220, a2-6）を参照。

16　上に『法華経』に明かす所の「小乗の三蔵に貪著する学者」を引くが如し　前注6を参照。

17　『成実論』に云わく，「故に我れは正しく三蔵の中の実義を論ぜんと欲す」　成実論巻第一，「故我欲正論　三藏中実義」（T32, no. 1646, p. 239, b2）を参照。

18　『大品経』勧学品は，三乗に同じく般若を学ぶを勧む　前注7を参照。

19　『中論』に云わく，「諸法実相を得るに，三種の人有り」『中論』巻第三，観法品，「仏説実相有三種。若得諸法実相，滅諸煩悩，名為声聞法。若生大悲発無上心，名為大乗。若仏不出世，無有仏法時，辟支仏因遠離生智」（T30, no. 1564, p. 25, b23-26）を参照。

20　『無量義経』に云わく，「摩訶般若，華厳海空は，菩薩の歴劫修行を宣説す」『無量義経』説法品，「次説方等十二部経，摩訶般若，華厳海雲，演（「雲演」は【宋】【元】【明】【宮】には「空宣」に作る）説菩薩歴劫修行，而百千比丘，万億人天無量得須陀洹，得斯陀含，得阿那含，得阿羅漢，住辟支仏因縁法中」（T09, no. 276, p. 386, b24-28）を参照。

21　『大智論』に云わく，「般若に二種有り。一には二乗に共じて説く。二に二乗に共じて説かず」　前注13を参照。

に非ざらんや。『華厳経』は「円[533b]満修多羅」を明かす[22]。此の経は,「一念に一切法を知るは,即ち是れ道場に坐す」と明かす[23]。『大品経』具足品に云わく,「一心に万行を具す」[24]と。『法華経』に云わく,「合掌し敬心を以て,具足の道を聞かんと欲す」[25]と。『涅槃経』に云わく,「是の大涅槃を,諸仏の法界と名づく」[26]と。『大智論』に云わく,「三智は其の実は一心に得」[27]と。此の如き等の諸経論は,豈に並びに円教を明かすに非ざらんや。是の義は下に在りて,自ら当に分明なるべし。

問うて曰う。四教の文は乃ち当に経論に散在すべけれども,未だ一処の経論に聚めて明かすを見ず。

---

22 『華厳経』は「円満修多羅」を明かす 『摩訶止観』巻第一上,「華厳曰,娑伽羅龍車軸雨海余地不堪。為上根性説円満修多羅。二乗如聾如瘂」(T46, no. 1911, p. 2, c18-19),『四教義』巻第一,「華厳経云,為説円満修多羅」(同前,no, 1929, p. 723, c7)を参照。

23 此の経は「一念に一切法を知るは,即ち是れ道場に坐す」を明かす 『維摩経』巻第上,菩薩品,「一念知一切法是道場。成就一切智故」(T14, no. 475, p. 543, a4-5)を参照。

24 『大品経』具足品に云わく,「一心に万行を具す」『大品般若経』巻第二十五には具足品がある(T08, no. 223, p. 404, b2)。また,『大品般若経』巻第二十三,一念品,「須菩提白仏言,世尊,云何菩薩摩訶薩行般若波羅蜜時,一念中具足六波羅蜜,四禅,四無量心,四無色定,四念処,四正勤,四如意足,五根,五力,七覚分,八聖道分,三解脱門,仏十力,四無所畏,四無礙智,十八不共法,大慈大悲,三十二相,八十随形好」(同前,p. 386, c26-p. 387, a2)を参照。『大智度論』には,「一心具万行品」という表現が出る(T25, no. 1509, p. 670, b24)。

25 『法華経』に云わく,「合掌し敬心を以て,具足の道を聞かんと欲す」『法華経』方便品,「諸天龍神等 其数如恒沙 求仏諸菩薩 大数有八万 又諸万億国 転輪聖王至 合掌以敬心 欲聞具足道」(T09, no. 262, p. 6, c3-6)を参照。

26 『涅槃経』に云わく,「是の大涅槃を,諸仏の法界と名づく」『涅槃経』巻第四,四相品,「大涅槃者,即是諸仏如来法界」(T12, no. 375, p. 629, b15)を参照。

27 『大智論』に云わく,「三智は其の実は一心に得」『大智度論』巻第二十七,「問曰,一心中得一切智,一切種智,断一切煩悩習。今云何言以一切智具足得一切種智,以一切種智断煩悩習。答曰,実一切一時得。此中為令人信般若波羅蜜故,次第差品説。欲令衆生得清浄心。是故如是説。復次雖一心中得,亦有初,中,後次第。如一心有三相,生因縁住,住因縁滅」(T25, no. 1509, p. 260, b17-24)を参照。

答えて曰う。復た的（まさ）しき四教の名目無しと雖も，今，大乗の経論に映傍して四教の名義を立つるは，『大涅槃経』に，四不可説は因縁有るが故に，亦た説くことを得可しと明かすが如し[28]。四種の説もて，以て前縁を化するは，即ち是れ四教なり。『大涅槃経』に四番に四諦の法輪を転ずるを明かす[29]は，即ち是れ四教の意なり。『法華経』に「三草二木は一地に生ずる所なり」と明かす[30]は，即ち是れ四教の意なり。『中論』に諸の異執を破し既（つ）くす。「因縁所生」の四句を説いて，仏の四説に通ずるは，即ち是れ四教の意なり[31]。此の如き等の四種の説法は，機に随いて物を利するは，即ち是れ四教の義にして，皆な是れ四教の異名なるのみ。

問うて曰う。『法華経』に云わく，「仏は平等に説くこと，一味の雨の如し」[32]と。何ぞ曾て定んで四説の殊なり有らんや。

---

28 『大涅槃経』に，四不可説は因縁有るが故に，亦た説くことを得可しと明かすが如し 『南本涅槃経』巻第十九，光明遍照高貴徳王菩薩品，「不生生不可説。生生亦不可説。生不生亦不可説。不生不生亦不可説。生亦不可説。不生亦不可説。有因縁故亦可得説」（T12, no. 375, p. 733, c9-12）を参照。

29 『大涅槃経』に四番に四諦の法輪を転ずるを明かす 『法華玄義』巻第二下にも，「四種四諦者，一生滅，二無生滅，三無量，四無作。其義出涅槃聖行品。約偏円事理分四種之殊」（T33, no. 1716, p. 700, c28-p. 701, a1）とあるように，天台宗では四種の四諦の典拠を『涅槃経』聖行品としている。しかし，経文にそのまま出ているわけではない。『法華玄義釋籤』（以下，『釋籤』と略記する）巻第五，「初文云其義出涅槃聖行品者，第十一第十二経広明聖諦。今多依彼。然聖行中明四諦義，兼含大小。若解生滅及以無量，其文則顕。無生無作文稍隠略。具如止観第一記」（同前，no. 1717, p. 849, c27-p. 850, a2）を参照。

30 『法華経』に「三草二木は一地に生ずる所なり」と明かす 『法華経』薬草喩品，「雖一地所生，一雨所潤，而諸草木各有差別」（T09, no. 262, p. 19, b5-6）を参照。

31 『中論』に諸の異執を破し既くす。「因縁所生」の四句を説いて，仏の四説に通ずるは，即ち是れ四教の意なり 『四教義』巻第一には，「中論破諸異執既訖，復説因縁四句，通佛四説，即是四教之意」（T46, no. 1929, p. 723, c21-23）とあり，「訖復」は甲本には，「洗浄」に作る。『維摩経玄疏籤録』（以下，『籤録』と略記する）には，「既，尽也」と注している。

32 『法華経』に云わく，「仏平等に説くこと，一味の雨の如し」『法華経』薬草喩品，「仏平等説，如一味雨」（T09, no. 262, p. 20, b2-3）を参照。

答えて曰う。上来処処に四不可説を引く。因縁有るが故に，亦た説くことを得可し。尚お未だ曾て定んで一説有らず。何ぞ曾て定んで四教有らんや。但だ衆生に四種の根性の不同有るを以てなり。謂う所は，下・中・上・上上の四根の不同なり。四説・四教の殊なりを感ずるを致すは，即ち是れ『法華経』に，「三草二木は一地の生ずる所なり」の譬えを明かして[33]，此の四根を譬うるなり。故に此の経に，「仏は一音を以て法を演説す。衆生は類に随いて各おの解を得」と云う[34]は，即ち是れ四根異なりて，仏の教えを解すこと同じからざるなり。但だ諸経に義を明かすこと同じからず。自ら異説異解，異説一解[35]，一説異解，一説一解，無説無解有り。故に此の経に云わく，「其れ法を説く者に説無く示無し。其れ法を聴く者に聞無く得無し」[36]と。若し此の意に達せば，四教もて点定[37]して義を立つること，何ぞ疑う所あらんや。

問うて曰う。四教の義は地論人の四宗[38]の義と同じきや。

答えて曰う。若し人問うて「四諦は四大と同じきや」と言わば，此れは云何んが答えん。今，四宗に依りて四教を立てざるは，意乃ち多塗なり。略し

---

33 『法華経』に，「三草二木は一地の生ずる所なり」の譬えを明かして　前注 30 を参照。

34 此の経に，「仏は一音を以て法を演説す。衆生は類に随いて各おの解を得」と云う『維摩経』巻上，仏国品，「仏以一音演説法　衆生随類各得解　皆謂世尊同其語　斯則神力不共法」（T14, no. 475, p. 538, a2-4）を参照。

35 異説一解　底本の「一解」を改める。『再校維摩経玄義』の頭注に「異説異解下，宋有異説二字」とある。

36 此の経に云わく，「其れ法を説く者に説無く示無し。其れ法を聴く者に聞無く得無し」『維摩経』巻上，弟子品，「夫説法者，無説無示。其聴法者，無聞無得。譬如幻士為幻人説法」（T14, no. 475, p. 540, a18-19）を参照。

37 点定　底本の「点空」を改める。『四教義』巻第一，「若達此意，四教点定立義」（T46, no. 1929, p. 724, a4）を参照。「点定」は，確定するの意。

38 「四宗」は，光統律師慧光（四六八―五三七）の四宗判を指す。『法華玄義』巻第十上には，因縁宗（『阿毘曇』），仮名宗（『成実論』），誑相宗（『大品般若経』・三論），常宗（『涅槃経』・『華厳経』）を四宗判として紹介している。『法華玄義』巻第十上，「六者仏馱三蔵学士光統所辨四宗判教。一因縁宗，指毘曇六因四縁。二仮名宗，指成論三仮。三誑相宗指大品，三論。四常宗，指涅槃，華厳等，常住仏性，本有湛然也」（T33, no. 1716, p. 801, b11-15）を参照。

て三[533c]妨を出だす。一に四宗の名義は，言方にして滞るに似たり。二に細かく尋ね研覈するに，名を立て義を作るは，便ならざるが似如（ごと）し。三に四宗の名義は，言は富博なりと雖も，一家往望して仏の教門を摂するに，猶お闕くる所有り。

一に四宗の名義は，言方にして滞るに似たりとは，彼れは四不可説に依りて，四悉檀を用て説かざれば，則ち滞を成ずるなり[39]。二に細かく尋ね研覈するに，名義は便ならざるが似如しとは，彼の四宗の毘曇に見有得道[40]を明かすは，因縁を宗と為すことを許す可し。三仮は是れ世諦なり。世諦を見れども，未だ道を得ず。何ぞ仮名を以て宗と為すことを得ん。『成論』は見空得道を明かす。何ぞ空を以て宗とせざるや。且らく『大智論』は三蔵教に三門の得道有るを明かす。空は是れ第二門にして，仮名の門無きなり。又た，『大智論』は，方広人[41]は十論[42]を取りて，一切法は不生不滅なりと説き，般若の意を失うを弾ず。豈に幻化を不真宗と為すことを得んや。今，諮（はか）りて曰わく，不真宗は即ち是れ通教にして，真宗は即ち是れ通宗なりとは，宗は則ち真・不真に通ず。不真は何ぞ宗を没して教を用うることを得ん。真宗は何れの意もて

39　彼れは四不可説に依りて，四悉檀を用て説かざれば，則ち滞を成ずるなり　『四教義』巻第一，「彼不約四不可説用四悉檀趣縁而説，即成滞也」（T46, no. 1929, p. 724, b20-21）を参照。

40　見有得道　底本の「通」を『再校維摩経玄義』に「通宋作道」とあり，これに従う。「見有得道」は，有を見て道（覚り）を得ること。

41　方広人　『大智度論』巻第一，「更有仏法中方広道人言，一切法不生不滅，空無所有，譬如兎角亀毛常無。如是等一切論議師輩，自守其法，不受余法，此是実，余者妄語。若自受其法，自法供養，自法修行，他法不受，不供養，為作過失」（T25, no. 1509, p. 61, a28-b4）を参照。また，『三論玄義』，「二者学大乗者，名方広道人。執於邪空，不知仮有。故失世諦。既執邪空，迷於正空。亦喪真矣」（T45, no. 1852, p. 6, a18-21）を参照。

42　十論　『大品般若経』巻第一，序品（大正八・二一七上を参照）には，諸法を幻・焔・水中月・虚空・響・揵闥婆城・夢・影・鏡中像・化の十種にたとえている。『大品般若経』，巻第一，序品，「無数億劫説法巧出，解了諸法如幻，如焔，如水中月，如虚空，如響，如揵闥婆城，如夢，如影，如鏡中像，如化，得無閡無所畏」（T08, no. 223, p. 217, a20-23）を参照。

教無くして宗を立つるや。宗に若し教無くば，何ぞ真と知ることを得んや[43]。

答えて曰う。『楞伽経』に云わく,「説通は童矇を教え, 宗通は菩薩を教う」[44]と。故に真を以て通宗と為すなり。又た，諮りて曰わく，若し爾らば，前の因縁・仮名・不真は皆な是れ童矇を教うれば，応に宗の名を立つべからざるなり。是くの如く覆却並決す[45]。意(こころ)に謂(おも)うに，四宗の名を立つるは，便ならざるが似如(ごと)きなり。

今，四教と言うは，仏は初めて得道する従り大涅槃に至るまで，一切の法門を顕示するに，言教に非ざること無きなり。

三に四宗もて義を明かすは，若し古今に比せば，実に富博と為すも，一家往望して仏法の意を摂するに, 猶お大いに闕くる所有り。今, 諸経論を採りて, 四教の義を立つ。一教に各おの四門有り。四教に合して十六門有り。即ち是れ十六宗もて義を明かすなり。彼の因縁・仮名の両宗は，此(ここ)に明かす所の三蔵教の有・空の二門と相い参ずるに似たり。猶お昆勒門，及び非有非空門を闕くるなり[46]。彼の不真宗は幻化の如きを明かす。此の通教の有門と相い参ず

---

43 『法華玄義』巻第十上,「次難四宗者，謂因縁宗……彼云。誑相不真宗即是通教。常宗秖是真宗。即是通宗者，宗則通真不真。不真何意沒宗而用教。真宗何意無教而立宗。宗若無教，何得知真。真宗若沒宗有教，則同名通教。若俱沒教留宗，則同名通宗。若俱安教，則同名通宗教。若留不真真，則名通不真宗教・通真宗教。通不真宗可為三乘通脩, 。通真宗亦応三乘通脩也。若言此通是融通之通者，通教亦是通真之真也。此則両名混同，義無別也。彼引楞伽経云，説通教童蒙，宗通教菩薩。故以真宗為通宗也。若爾，是則因縁・仮名・不真，皆是童蒙。不応悉立宗也。覆却並決。四宗名義，甚不便也」(T33, no. 1716, p. 804, b6-c15) を参照。

44 『楞伽経』に云わく,「説通は童矇を教え, 宗通は菩薩を教う」『楞伽阿跋多羅宝経』巻第三, 一切仏語心品,「謂我二種通　宗通及言説　説者授童蒙　宗為修行者」(T16. 503a29-b1) を参照。なお，前注 43 を参照。

45 覆却並決す 「覆却」は，くつがえししりぞけること。具体的には，四宗についてあれこれと検討することを意味するか。「並決」は，(四宗について) 非難してきっぱりと決めること。なお，前注 43 を参照。

46 猶お昆勒門, 及び非有非空門を闕くるなり 『四教義』巻第一に,「彼因縁仮名両宗, 似与此所明三蔵教有空二門相参，猶闕昆勒門及非有非空両門也」(T46, no. 1929, p. 724, c16-18) とあるように,「与」がある方が読みやすい。「昆勒門」は，亦有亦空門に該当する。

るに似たり。余の三門は彼しこに明かさざる所なり。彼の真宗は此の別教の有門と相い参ずるに似たり。三門は彼しこに明かさざる所なり。是れ則ち四宗もて義を明かすに，但だ三教の四門[47]と相い参ずることを得るのみにして，円教の四門は彼しこに明かさざる所なり。四教に猶お十二門有りて[48]，彼の四宗に明かさざる所なり。

又た，護身法師[49]は五宗を用て義を明かす。四宗は前の如し。長（ふや）して法界宗を立つ。此の円教の有門と相い参ずるに似たり。四教に猶お十一門有りて[50]，彼しこに明かさざる所なり。

耆闍法師[51]は六宗を用て義を明かす。三宗は此の三門と相い参ずるに似たり。上に分別するが如し。彼の真宗は，此の通教の空門と相い参ず。彼の常宗は，此の別教の有門と相い参ずるに似たり。彼の円宗は，此の円教の有門と相い参ずるに似たり。此の四教に猶お十門有りて[52]，彼の六宗に明かさざる所なり。故に知る，四宗・五宗・六宗は古今已来，義を明かすこと富博なりと言うと雖も，今家往望して仏の教門を摂するに，猶お闕くる所有るなり。

47　三教の四門　蔵教の有門・空門，通教の有門，別教の有門を指す。

48　四教に猶お十二門有りて　四教の十六門のうち，蔵教の有門・空門，通教の有門，別教の有門を除いたもの。

49　護身法師　護身［寺］自軌大乗　護身寺自軌については未詳。『釈籤』巻第十九，「護身寺自軌法師大乗是人為立号，以重其所習，故美之称為大乗」（T33, no. 1717, p. 951, b7-9），希迪『五教章集成記』巻第一，「五護身法師。義苑曰，護身寺名。師諱自軌。探玄曰，此於前第四宗内，開真仏性，以為真宗。即涅槃等経」（X58, no. 999, p. 405, c4-5）を参照。また，『法華玄義』巻第十上，「六者仏駄三蔵学士光統所辨四宗判教。一因縁宗。指毘曇六因四縁。二仮名宗。指成論三仮。三誑相宗。指大品三論。四常宗。指涅槃華厳等常住仏性本有湛然也。七者有師開五宗教。四義不異前。更指華厳為法界宗。即護身自軌大乗所用也。八者有人称光統云，四宗有所不收。更開六宗。指法華万善同帰。諸仏法久後　要当説真実。名為真宗。大集染浄俱融。法界円普，名為円宗。余四宗如前。即是耆闍凛師所用」（T33, no. 1716, p. 801, b11-21）を参照。

50　四教に猶お十一門有りて　四教の十六門のうち，蔵教の有門・空門，通教の有門，別教の有門，円教の有門を除いたもの。

51　耆闍法師　耆闍寺安凛（五〇七―五八三）のこと。前注 49 を参照。

52　此の四教に猶お十門有りて　四教の十六門のうち，蔵教の有門・空門，通教の有門・空門，別教の有門，円教の有門を除いたもの。

四悉檀の義を明かす所以は，正しく是れ一家の教を通じ法を説くことは古今の法を説くことと，運用同じからざるを述ぶればなり。前に三観を明かし，竪に諸法を破すこと，略して数十番と為す。次に，此の下に四教の所詮を明かし，諸教に約して義を立つ。其の尋ね覽(み)る者は，則ち知る，諸禅師，及び三論師の破の義，及び立の義と，意同じからざるなり。

問うて曰う。四教は遍く衆経を通ず。何ぞ的しく用て此の経を通ずることを得んや。

答えて曰う。今，四教の義を撰して，遍く諸経を通ずるに，別に大本有り。略して其の要を撮る。此の経の文を通ずとは，正しく此の経は具さに四教もて道に入るを明かすと言う。故に須らく大意を知るべきなり。但だ諸師は多く経を採りて論を通じ，晩生をして皆な論は富み経は貧しと謂わしむるを致す。今は経の論を採りて経の意を通じ，後生をして経は富み論は貧しと知らしめんと欲するなり。大乗は真仏の説く所，功徳無量にして，是れ入道の正因なりと敬重す。経を軽んじ論を重んずるは，甚だ傷(いた)む可きなり。

3.2　所詮を辨ず

第二に所詮を辨ずとは，夫れ教は是れ能詮，理は是れ所詮なり。故に理に因りて教を設け，教に由りて理を顕わす。理に即せば教に非ず，教に即せば理に非ず。理を離れて教無く，教を離れて理無し。故に『思益経』に云わく，「菩提の中に文字無く，文字の中に亦た菩提無し。菩提を離れて文字無く，文字を離れて菩提無し」[53] と。菩提を離れて文字無きを以ての故に，理に約して教を施す。文字を離れて菩提無きが故に，教を施して即ち能く理を顕わす。是れ則ち教を能詮と為し，理を所詮と為す意は此に在り。言う所の理とは，即ち是れ諦なり。今，諦に約して理を明かす。理に由りて教を起こし，教は能く理を詮ず。教は是れ能詮，理は是れ所詮なり。

---

53 『思益経』に云わく，「菩提の中に文字無く，文字の中に亦た菩提無し。菩提を離れて文字無く，文字を離れて菩提無し」 守徳本純『維摩詰経四教玄義籤録』によれば，『思益梵天所問経』の取意である。

所詮の義に就いて，略して四意と為す。一に四諦の理に約して所詮を明かし，二に三諦の理に約して所詮を明かし，三に二諦の理に約[54]して所詮を明かし，四に一諦の理に約して所詮を明かす。

534b

3.21　四諦の理に約して所詮を明かす

第一に四諦に約して所詮を明かすとは，即ち三意と為す。一に所詮の四諦の理を明かし，二に能詮の教を明かし，三に経論に約すを明かす。

3.211　所詮の四諦の理を明かす

一に所詮の四諦の理を明かすとは，四種の四諦有り。一に生滅の四諦，二に無生の四諦，三に無量の四諦，四に無作の四諦なり。大意は『大涅槃経』に出ず。

3.212　能詮の教を明かす

二に能詮の教を明かすとは，即ち是れ四教は能く四種の四諦の理を詮ずるなり。即ち四と為す。一に三蔵教は生滅の四諦の理を詮じ，二に通教は無生の四真諦の理を詮ずるを明かし，三に別教は無量の四諦の理を詮ずるを明かし，四に円教は無作の四諦の理を詮ずるを明かすなり。

3.213　経論に対するを明かす

三に経論に対するを明かすとは，即ち二意と為す。一に経に対し，二に論に対す。

3.2131　経に対す

一に経に対すとは，『華厳経』の若きは，多く別･円の両教を明かし，無量･

54　約　底本の「明」を，『再校維摩玄義』の頭注「明二明宋作約」と『四教義』巻第二，「三約二諦之理以明所詮」（T46, no. 1929, p. 725, b24-25）によって，「約」に改める。

無作の二種の四諦の理を詮ず。声聞経は，但だ三蔵教を明かし，生滅の四諦の理を詮ずるのみ。『大集』の方等，及び此の経は，四教を明かし，四種の四諦の理を詮ず。『摩訶般若』は，多く三教を明かし，三種の四諦の理を詮ず。『法華経』は，但だ円教[55]を説き，無作の四諦の理を詮ずるのみ。『大涅槃』は四教を明かし，四種の四諦の理を詮ずるなり。

3.2132　論に対す

二に論に対するを明かすとは，若し別して経の論を通ぜば，経に類して知る可し。若し通じて経の論を申べば，『中論』に一切内外の顛倒執諍を破し竟わるが如し。

外人は問うて曰う。若し一切世間は皆な空・無所有ならば，即ち応に無生無滅なるべし。生滅無きを以ての故に，則ち四諦・四沙門果・三宝無し。若し空法を受けば，此の如き等の過有り[56]。

論主は答えて曰う。汝は今，実に空・空の因縁を知ること能わず[57]。諸仏は二諦に依り，衆生の為めに説法す。若し二諦を知らざれば，則ち真の仏法を

55　教　底本の「経」を，文意と『四教義』巻第二，「法華但用円教詮無作四実諦理」（T46, no. 1929, p. 727, a23-24）によって，「教」に改める。

56　外人は問うて曰う。若し一切世間は皆な空・無所有ならば，即ち応に無生無滅なるべし。生滅無きを以ての故に，則ち四諦・四沙門果・三宝無し。若し空法を受けば，此の如き等の過有り　『中論』巻第四，観四諦品，「若一切世間皆空無所有者，即応無生無滅。以無生無滅故，則無四聖諦。何以故。従集諦生苦諦。集諦是因，苦諦是果。滅苦集諦，名為滅諦。能至滅諦，名為道諦。道諦是因，滅諦是果。如是四諦有因有果。若無生無滅，則無四諦。四諦無故，則無見苦断集証滅修道。見苦断集證滅修道無故，則無四沙門果。四沙門果無故，則無四向四得者。若無此八賢聖，則無僧宝。又四聖諦無故，法宝亦無。若無法宝僧宝者，云何有仏。得法名為仏。無法，何有仏。汝説諸法皆空，則壊三宝。復次空法壊因果，亦壊於罪福。亦復悉毀壊一切世俗法。若受空法者，則破罪福及罪」（T30, no. 1564, p. 32 p. 32, b23-c8）を参照。

57　論主は答えて曰う。汝は今，実に空・空の因縁を知ること能わず　『中論』巻第四，観四諦品，「答曰。汝今実不能知空空因縁及知於空義。是故自生悩」（同前，p. 32, c9-12）を参照。

知らず[58]。空の義有るを以ての故に，則ち一切法成ずることを得。若し空の義無くば，一切法は則ち成ぜず[59]。一切法は成ぜば，四諦・四沙門果・三宝有るなり。

今，此の語を釈す。論主は執見を破すこと既に尽くせば，四諦・四沙門果・三宝有るを明かすとは，即ち是れ摩訶衍教の三種の四諦，三種の四沙門果，三種の三宝を申ぶるなり。

問うて曰う。云何んが知ることを得る。

答えて曰う。論主は偈を説くが故に有りと知るなり。偈に云わく，「因縁もて生ずる所の法は，我れ即ち是れ空なりと説く」[60]と。此の偈は通教の大乗，無生の四[534c]諦・四沙門果・三宝を詮ずるを申ぶるなり。偈に，「亦た名づけて仮名と為す」と云うは，即ち是れ別教の大乗，無量の四聖諦・四沙門果・三宝を詮ずるを申ぶるなり。偈に，「亦た中道の義と名づく」と云うは，即ち是れ円教の大乗，無作の四実諦・四沙門果・三宝を詮ずるなり。破申の意なり。大乗の三教は祇(た)だ一偈を用うるのみ。論を作るの巧[61]妙は，此に在り。次に後に両品を説く。初品に云わく，「問うて曰う。已に摩訶衍は第一義に入ると知る。今，声聞の経を聞いて，第一義に入らんと欲す」[62]と。論主は具さに

58　諸仏は二諦に依り，衆生の為めに説法す。若し二諦を知らざれば，則ち真の仏法を知らず　『中論』巻第四，観四諦品，「諸仏依二諦，為衆生説法。一以世俗諦，二第一義諦。若人不能知分別於二諦，則於深仏法，不知真実義」（同前，p. 32, c16-19）を参照。

59　空の義有るを以ての故に，則ち一切法成ずることを得。若し空の義無くば，一切法は則ち成ぜず　『中論』巻第四，観四諦品，「復次以有空義故，一切法得成。若無空義者，一切則不成。以有空義故，一切世間出世間法皆悉成就。若無空義，則皆不成就」（同前，p. 33, a21-25）を参照。

60　偈に云わく，「因縁もて生ずる所の法は，我れ即ち是れ空なりと説く」『中論』巻第四，観四諦品，「衆因縁生法　我説即是無　亦為是仮名　亦是中道義」（同前，p. 33, b11-13）を参照。

61　巧　底本の「功」は，『四教義』巻第二，「作論之巧妙在於斯」（T46, no. 1929, p. 727, b16）によって「巧」に改める。

62　初品に云わく，「問うて曰う。已に摩訶衍は第一義に入ると知る。今，声聞の経を聞いて，第一義に入らんと欲す　『中論』巻第四，観十二因縁品，「問曰。汝以摩訶

生滅の十二因縁を明かし，六十二見を破し，第一義に入る。即ち是れ鈍根の声聞の弟子の為めに，因縁生滅の相を説く。生滅の因縁は，即ち是れ生滅の四諦・四沙門果・三宝なり。『中論』は前に摩訶衍の通・別・円の三教の三種の四諦・四沙門果・三宝を申ぶ。後の両品に三蔵の生滅の四諦・四沙門果・三宝を申ぶるは，後世の人の根は転(うた)た鈍なるを以て，応に須らく還(ま)た此の教を用うべければなり。是れ則ち『中論』の文は略なれども，義は富めり。仏の四教を申ぶること既に明らかなれば，四諦の理を詮ずること已に顕わるるが故に，四諦有りと言うなり。乃ち是れ如意珠[63]の論にして，唼水珠の論[64]に非ざるなり。若し此の義を解せずば，単複もて仮を織り，未だ若為(いか)んが経を通ずるかを知らず。四仮[65]もて経を通ずること，意終に見難きなり。

3.22　三諦の理に約して四教の所詮の理を明かす

第二に三諦に約して四教の所詮の理を明かすとは，即ち三意と為す。一に三諦の所詮の理を明かし，二に能詮の四教を明かし，三に経論に約す。

3.221　三諦の所詮の理を明かす

一に三諦の所詮の理を明かすとは，三諦の名義は具さに『瓔珞』，『仁王』

衍説第一義道。我今欲聞説声聞法入第一義道」（T30, no. 1564, p. 36, b18-19）を参照。

63　珠　底本の「殊」を，『再校維摩玄義』，『四教義』巻第二，「乃是如意珠論，非唾水精論也」（T46, no. 1929, p. 727, b26-27）によって，「珠」に改める。

64　唼水珠の論　「珠」については，前注 63 と同じ。『四教義』巻第二にも，「乃是如意珠論，非唾水精論也」（同前，p. 727, b26-27）とあるが，「唾水精論」は，甲本には「水精珠論」に作り，乙本には「唼水論」に作る。「唼」は，すするの意であるが，全体として意味不明。守篤本純『維摩詰経四教玄義籤録』には，「唼水，明本作水精珠三字。一本作唾水水精四字。唾，是唼之差也。宝地引暹記〔云々〕。未詳。今謂，此是古人調中論人之語。以下第三巻〔七号〕叙三論人破地人義云，汝是不見真空。亦是妄水義為証。今祖師顕論巧説破申之旨，故有此歎辞也」とある。

65　四仮　『摩訶止観』巻第五下，「仮者，虚妄顛倒，名之仮耳。例前亦応言単四仮・複四仮・具足四仮」（T46, no. 1911, p. 63, a4-5），『大乗玄論』巻第五，「仮乃衆多。略明四種。一因縁，二随縁，三就縁，四対縁」（T45, no. 1853, p. 71, c24-25）を参照。

の両経に出ず。『経』に云わく,「一に有諦,二に無諦,三に中道第一義諦なり」[66]と。有諦とは，世の人の心に見る所の理の如きを，名づけて有諦と為す。亦た俗諦と名づく。無諦とは，出世の人の心に見る所の理を，名づけて無諦と為す。亦た真諦と名づく。中道第一義諦とは，諸仏菩薩の見る所の理を，中道第一義諦と名づく。亦た一実諦と名づく。故に,『大涅槃経』に云わく,「凡夫とは有，二乗とは無，諸仏菩薩は不有不無なり」[67]と。三諦の義は，入不二法門品を釈するに至りて，当に略して明かすべきなり。

3.222　能詮の四教を明かす

二に能詮の四教を明かすとは，即ち四と為す。

一に三蔵教は但だ二諦の理を詮ずるのみ。所以に稟教の流れは，仏性・常住涅槃を聞かず。

二に通教も亦た但だ二諦の理を詮ずるのみ。所以に稟教の[535a]流れも亦た仏性・常住涅槃を聞かず。三乗は猶お灰断[68]の果を存するなり。

三に別教は別して三諦の理を詮ず。所以に稟教の流れは，三十心に但だ二観・二智の方便を成じ，登地に方に乃ち仏性を見，法流に入るなり。

66　『経』に云わく,「一に有諦，二に無諦，三に中道第一義諦なり」『仁王般若波羅蜜経』巻第一,二諦品,「大王，若有若無者，即世諦也。以三諦摂一切法，空諦，色諦，心諦故，我説一切法不出三諦」（T08, no. 245, p. 829, b27-29）を参照。

67　『大涅槃経』に云わく,「凡夫とは有，二乗とは無，諸仏菩薩は不有不無なり」『南本涅槃経』巻第十二，聖行品,「如出世人之所知者，名第一義諦。世人知者，名為世諦」（T12, no. 375, p. 684, c17-18）を参照。また,『四教義』巻第二,「如涅槃経云，如世人心所見者，名為世諦。二無諦者，三乗出世之人所見真空，無名無相，故名為無。審実不虚，目之為諦，故言無諦。亦名真諦，亦名第一義諦。故涅槃経云，如出世人心所見，故名為第一義諦。三中道第一義諦者，遮二辺，故説名中道。言遮二辺者，遮凡夫愛見有辺，遮二乗所見無名無相空辺，遮俗諦・真諦之二辺，遮世諦・第一義諦之二辺，遮如此等之二辺，名為不二。不二之理，目之為中。此理虚通無擁（甲本には「壅」に作る），名之為道。最上無過，故称第一義。深有所以，目之為義。諸仏菩薩之所証見，審実不虚，謂之為諦，故言中道第一義諦」（T46, no. 1929, p. 727, c7-19）を参照。

68　灰断　灰身滅智と同義。無余涅槃に入って，身も心＝智もまったく無に帰すこと。

四に円教は円かに三諦を詮ず。稟教の流れは，初心に即ち仏知見を開き，自然に薩婆若海に流入するなり。

3.223　経論に対するを明かす

三に経論に対するを明かすとは，『華厳』は但だ仮名俗諦・中道を詮ずるのみ。又た解して云わく，『華厳』の教は別の三諦一心を詮ず。三蔵の漸教は真俗二諦を詮ず。方等大乗の教は三諦を詮ずること，一往は『華厳』に同じ。『摩訶般若』も亦た具さに三諦を詮ずること，一往は『華厳』に同じ。『法華』は但だ一心三諦を詮ずるのみ。『涅槃』は備さに三諦を詮ずること，一往は亦た『華厳』に同じきなり。

諸論の経に随うこと，之れに類して知る可し。『中論』の偈に云わく，「因縁もて生ずる所の法は，我れ即ち是れ空なりと説く」と。此れは即ち真諦を詮ず。「亦た名づけて仮名と為す」と。即ち俗諦を詮ずるなり。「亦た中道の義と名づく」と。即ち中道第一義諦を詮ずるなり。此の偈は即ち是れ摩訶衍，三諦の理を詮ずるを申ぶ。下の両品の若きは，声聞経もて，第一義に入るを明かす。此れは即ち是れ別して，三蔵教，二諦の理を詮ずるを申ぶるなり。

3.23　二諦の理に約して所詮を明かす

第三に二諦に約して所詮を明かすとは，亦た三意と為す。一に正しく所詮の理を明かし，二に能詮の教を明かし，三に経論に約す。

3.231　正しく所詮の理を明かす

一に所詮の理を明かすとは，即ち是れ二諦の理なり。二諦に二種有り。一には理外の二諦，二には理内の二諦なり。若し真諦は仏性に非ずば，即ち是れ理外の二諦なり。真諦は即ち仏性にして，即ち是れ理内の二諦なり。

一に理外の二諦に二種有り。一には不即の二諦・生滅の二諦なり。二には相即の二諦・無生の二諦なり。故に『大品経』に云わく，「色に即して是れ

空なり。色滅して空なるに非ず」[69] と。色滅して方に空なるは，是れ不即の二諦なり。色に即して是れ空なるは，相即の二諦なり。

二に理内の二諦に亦た二種有るを明かす。一に不即の二諦，二に相即の二諦なり。不即の二諦は，即ち是れ無量の二諦なり。故に『大涅槃経』に云わく，「世諦を分別するに，無量の相有り。第一義諦に無量の相有り。諸の声聞・縁覚の知る所に非ざるなり」[70] と。二に相即の二諦は，無作の二諦なり。

3.232　能詮の教を明かす

二に能詮の四教を明かすとは，三蔵教の若きは理外の不即の二諦を詮じ，
535b
通教の若きは，理外の相即の二諦を詮じ，別教は理内の不即の二諦を詮じ，円教は理内の相即の二諦を詮ずるなり。

3.233　経論に対す

三に経論に対すとは，『華厳経』は理内の二種の二諦を詮じ，三蔵教は理外の不即の二諦を詮じ，方等大乗は理内・理外の四種の二諦を詮じ，『摩訶般若』は理外の相即の二諦・理内の二種の二諦を詮じ，『法華経』は但だ理内の相即の二諦を詮じ，『涅槃経』は通じて理内・理外の四種の二諦を詮ず。諸論の経を通ずること，之れに類して解す可し。『中論』の偈に云わく，「因縁もて生ずる所の法は，我れ即ち是れ空なりと説く」と。此れは理外の相即の二諦を申ぶ。「亦た名づけて仮名と為す。亦た中道の義と名づく」と。此れは理内の不相即・相即の二諦を申ぶ。後の両品は声聞の第一義に入るを明かす。即ち是れ三蔵教の理外の不相即の二諦を詮するを申ぶるなり。

---

69 『大品経』に云わく，「色に即して是れ空なり。色滅して空なるに非ず」『大品般若経』には見られない。類似の文は，『維摩経』巻中，入不二法門品，「色，色空為二。色即是空，非色滅空，色性自空」（T14, no. 475, p. 551, a19-20）を参照。

70 『大涅槃経』に云わく，「世諦を分別するに，無量の相有り。第一義諦に無量の相有り。諸の声聞・縁覚の知る所に非ず」『南本涅槃経』巻第十二，聖行品，「知世諦者，是名中智。分別世諦，無量無邊辺不可称計，非諸声聞・縁覚所知。是名上智。如是等義，我於彼経亦不説之」（T12, no. 375, p. 684, c3-5）を参照。

3.24　一諦の理に約して所詮の理を明かす

第四に一諦の理に約して所詮を明かすとは，亦た三意と為す。一には正しく所詮の理を明かし，二に能詮の教を明かし，三に経論に約す。

3.241　正しく所詮の理を明かす

一に所詮の理を明かすとは，即ち是れ一諦の理なり。何等を名づけて一諦と為すや。諦は審実に名づく。審実の法は，即ち是れ不二なり。豈に是れ三諦・二諦は皆な審実と名づけんや。今，真俗は説いて諦と為すと明かすは，但だ是れ方便にして，実に諦に非ざるなり。故に『涅槃経』に云わく，「言う所の二諦は，其れ実に是れ一なり。如来は方便もて衆生を化せんが為めの故に，説いて二と為す。譬えば日月転ぜざれども，酔人は転ずと見るが如し。当に知るべし，唯だ不転の日有るのみ。酔わざるの人は同じく見る。豈に別して迴転するの日有らん。若し実に転日有らば，酔わざるの人も亦た応に並びに見るべきなり」[71]と。一諦は真日の如し。二諦は転日の如し。真日の審実なるを，一諦と名づく可し。転日は実ならず。何ぞ二諦有らん。方便もて二を説く。実の義は成ぜざるが故に，諦に非ざるなり。今，此の一実諦を以て，所詮の理と為すなり。

3.242　能詮の四教を明かす

二に能詮の教を明かすとは，蔵教・通教の若きは，正しく是れ煩悩の悪酒未だ吐かず，唯だ転日を詮じて，二諦有りと説き，一実諦を詮ずること能わざるなり。別教の若きは，一実諦を詮じ，転日を離れて不転の日有るが如し。

71　『涅槃経』に云わく，「言う所の二諦は……酔わざるの人も亦た応に並びに見るべきなり」『南本涅槃経』巻第二，哀歎品，「如彼醉人見上日月，実非迴転，生迴転想。衆生亦爾。為諸煩悩，無明所覆，生顛倒心，我計無我，常計無常，浄計不浄，酪計為苦。以為煩悩之所覆故，雖生此想，不達其義，如彼醉人於非転処而生転想。我者，即是仏義。常者是法身義。酪者是涅槃義。浄者是法義」（T12, no. 375, p. 617, a18-24）を参照。

円教は一実諦を詮じ，転日は即ち不転の日なり。

3.243　経論に対す

三に経論に対すとは，『華厳』の教の若きは，真俗は即ち一実諦なりと詮じ，不即の方便を帯ぶ。三蔵教の若きは，一向に一実諦を詮ぜざるなり。535c 方等教の若きは，一実諦を詮ずること『華厳』に同じ。『摩訶般若』の教は一実を詮ずること亦た『華厳』に同じ。故に，『無量義経』に云わく，「仏成道して以来四十余年，未だ真実を顕わさず」[72] と。今謂わく，何ぞ実諦を説かざること有らん。但だ或いは時に縁に赴きて二諦・三諦・不即の一諦の方便を開くのみ。覆う所の『法華』の教は一実諦を詮じ，復た不即の方便無し。但だ一切は即ち一実諦なりと論ずるなり。故に，『法華経』に説く，「二万億の日月灯明仏は皆な云わく，『諸法実相の義は，已に汝等の為めに説く。今，仏は光明を放ち，実相の義を発するを助く。諸仏の法は久しくして後，要（かなら）ず当に真実を説くべし。正直に方便を捨てて，但だ無上道を説く』」[73] と。『涅槃経』の若きは，方等の通釈と同じ。仏性に入るを異と為す。諸論の経に随うこと，之れに類して解す可し。『中論』の偈に云うが如し，「亦た中道の義と名づく」と。此れは即ち是れ一実諦の教を申ぶるなり。故に，青目釈して云わく，「二辺を遮するが故に，名づけて中道と為す」[74] と。即ち是れ因縁の空辺・仮辺を遮す。此の二辺に非ざれば，則ち真俗二諦に非ず，一実諦と名づくるなり。

72　『無量義経』に云わく，「仏成道して以来四十余年，未だ真実を顕わさず」『無量義経』説法品，「性欲不同，種種説法。種種説法，以方便力，四十余年未曾顕実」（T09, no. 276, p. 386, a29-b2）を参照。

73　『法華経』に説く，「二万億……正直に方便を捨てて，但だ無上道を説く』」『法華経』序品，「諸法実相義　已為汝等説　我今於中夜　当入於涅槃」（T09, no. 262, p. 5, a10-12），同，序品，「今仏放光明　助発実相義」（同前，p. 5, b19），　同，方便品，「世尊法久後　要当説真実」（同前，p. 6, a23），同，方便品，「正直捨方便　但無上道」（同前，p. 10, a19）を参照。

74　青目釈して云わく，「二辺を遮するが故に，名づけて中道と為す」『中論』巻第四，観四諦品，「離有無二辺，故名為中道」（T30, no. 1564, p. 33, b18）を参照。

故に，『大涅槃経』に云わく，「一実諦とは，則ち二無きなり」[75] と。又た，云わく，「無二の性は，即ち是れ実性なり」[76] と。無二の性は，即ち是れ入不二法門なり。又た，一実諦とは，即ち是れ不生不生なり。不生不生は不可説なるが故に，浄名居士は黙然として口を杜ぐ。文殊の称歎の意は此に在るなり [77]。

75　『大涅槃経』に云わく，「一実諦とは，則ち二無きなり」『南本涅槃経』巻第十二，聖行品，「実諦者，一道清浄，無有二也」（T12, no. 375, p. 685, b1-2）を参照。

76　云わく，「無二の性は即ち是れ実性なり」『南本涅槃経』巻第十二，如来性品，「智者了達其性無二。無二之性，即是実性」（同前，p. 651, c3-4）を参照。

77　浄名居士は黙然として口を杜ぐ。文殊の称歎の意は此に在るなり　『維摩経』巻中，入不二法門品，「於是文殊師利問維摩詰，我等各自説已，仁者当説何等是菩薩入不二法門。時維摩詰默然無言。文殊師利歎曰，善哉，善哉。乃至無有文字語言，是真入不二法門」（T14, no. 475, p. 551, c20-24）を参照。